

テーマ

和を以て貴しと為す ～過去から未来へ繋がる心～

公益社団法人 厚木青年会議所 2019年度
第51代理事長 白鳥 佑記

【はじめに】

1969年、この厚木市・愛川町・清川村という三市町村の未来の為に、志を同じくする青年が集いました。その青年たちの英知と勇気と情熱は、その後に集いし多くの青年によって受け継がれ、明るい豊かな社会を実現すべく、今日まで、歴史と伝統を築き上げて参りました。そして、本年で創立より50年。半世紀という大きな節目を迎えた我々、厚木青年会議所は、過去より脈々と紡がれてきた歴史と伝統が織りなす心を、次の半世紀への更なる飛躍へと繋げるべく、誇りと覚悟をもって継承して参ります。

【温故知新と恩故到新（50周年）】

半世紀にもわたって厚木青年会議所が守り続けてきた矜持は、歴史と伝統という財産として、世代を超えて、会員という個々人に受け継がれてきています。いまこそ、歴史の集積から知恵を学び新しいことを発見するという温故知新の精神は勿論のこと、それだけではなく、先人たちへの最大限の感謝の心をもって、新しい時代を切り開いていく、恩故到新ともいべき精神で、この歴史的な瞬間を迎えるべきであります。

50周年という大きな節目を迎えるにあたって、会員だけでなく、先輩諸兄や地域住民の方々、そしてこれまで厚木青年会議所の歴史に関わった全ての方々への感謝の心を示すとともに、未来に向けたはじめの一步を踏み出します。記念式典を含めあらゆる事業において、本年一年間を通じて、厚木青年会議所が50周年を迎えるということを常に意識した事業構築をしていくことで、内外に対し、我々が歴史的瞬間に立ち会っているのだという機運を高めて参ります。

節目とは、成長し続ける竹の節々のように、過去の集積点と未来への始まりの起点を表しています。創立50周年という大きな節目を迎えている我々は、集積された過去の歴史と伝統、そして受け継がれてきた心を次代へ繋げる、その第一歩目を

踏み出す役割を担っています。この大役を担う我々こそが、今こそ総力を挙げて、半世紀の集大成と次の半世紀への大きな一歩目として、後世に語り継がれるような厚木青年会議所の象徴的な事績を残そうではありませんか。10年後、20年後、そして半世紀後になっても鮮明に想起されるような、記録と記憶に残る周年事業を目指し、英知と勇気と情熱をもって活動して参ります。

【同志が集い、同志と励む、青年会議所（会員拡大）】

青年会議所を動かしているのは、資産や組織ではなく、それを扱う「人」に他なりません。青年会議所にとって「人」は最も重要な宝であり、不可欠な要素であります。思うに、会員拡大は、青年会議所のために行うのではなく、その背景にある「まち」のために行うものであります。すなわち、同じ思想のもとで同じ活動をする仲間が一人でも増えれば、我々がまちのために行う運動は、より効果的に、より充実した体制で行うことができるようになるはずです。一方で、たとえ、まちに無関心な青年が我々の仲間になったとしても、その会員は、我々と共に活動することで、このまちのことを深く学び、深く考え、能動的に行動する機会を得て、青年として積極的变化を遂げることとなります。今までまちに興味がない青年がたった一人でもまちのことを考えるようになるだけで、我々のまちは一歩前進したと言えるのではないのでしょうか。会員拡大は、青年会議所の同志が増えるというだけでなく、その先にある「まちの成長」を見据えて、積極的に行っていくべき最重要事項の一つであります。

もっとも、会員拡大は、単に入会人数を増加させるという“攻めの拡大”だけではなく、入会してからの研修や仲間との絆をつくることを担当する委員会と連携し、入会しても「辞めることがない」という意味での“守りの拡大”も必要不可欠であると考えます。目標数を設定しそれに向かって増員を目指すことは重要ですが、徒に数を増やすだけではなく、入会した後のフォロー体制の構築など、“攻守”両面での会員拡大を推し進めます。

【かけがえのない仲間との交流と成長（会員開発）】

青年会議所の役割や意義は何なのか、青年会議所活動を通じて我々は何ができるのか、そしてそもそも青年会議所とは何なのか、そのような青年会議所についての知識や思想を理解し、JAYCEEとして成長すること、これはたった一人ではできません。ひざを突き合わせて教えてくれる先輩や、背中で語るチームリーダー、そして、共に切磋琢磨する同期の存在、支えてくれる後輩たち、様々な立場の仲間を支えられて、青年会議所の会員は JAYCEE として活動することができるようになります。

青年会議所に関する研修の機会を利用するだけでなく、会員間での密な交流の機会を設けることで、肌で青年会議所活動の神髄を体験することができます。そして、

例会や事業の中でリーダーが JAYCEE としての姿やチームリーダー像を見せることこそ、最大限の会員研修たり得ると考えます。アイドルが、24時間365日、アイドルを演じ続けるように、青年会議所のリーダーは常にチームに理想的なリーダーとしての姿を見せ続けなければなりません。殊に、会の中枢を担うメンバーや、研修を扱うリーダーは、例会や事業において率先して行動するだけでなく、青年会議所活動以外の部分においても、メンバーや市民が憧れるような存在であり続けなければなりません。

【地元情報局としての青年会議所（広報）】

「今度の日曜日の予定は、厚木 JC のホームページを見て、地域のイベントを検索してみよう！」

こんな会話が家庭から聞こえてくる、私が理想とする青年会議所は、このような地元情報の発信拠点となっている姿です。厚木青年会議所のために地域があるのではなく、地域のために厚木青年会議所がある。我々厚木青年会議所は、自分達の事業を対外にアピールしていくだけではなく、地域のあらゆる情報を地域住民、そして地域外住民に発信していく責務を負っていると考えます。これは、単なる情報発信にとどまらず、定点撮影事業によって40年以上も前からこのまちの風景を記録し続けてきた我々厚木青年会議所にしかできない、我々厚木青年会議所だからこそできる情報発信を行うことができるのではないのでしょうか。このような「地元情報局」としての厚木青年会議所を広報活動の核心に据え、地域住民からの期待と信頼を持った、そんな団体としての評価を得られるような厚木青年会議所の周知につなげます。

また、本年が厚木青年会議所創立50周年という大きな節目であることを好機と捉え、対外に向けて積極的に我々の存在と活動をアピールしていくべきであります。メモリアルイヤーをただ漫然と過ごすのではなく、次の半世紀へのステップとなるよう、広く世間に厚木青年会議所をアピールする契機とします。厚木青年会議所の存在と活動の周知を土台として、更に地元情報の発信をすることによってはじめて、「地元情報局」としての厚木青年会議所の広報活動が市民にとって有用な存在となるに違いありません。

【ふるさとに映える笑顔（青少年）】

私達が愛するこの地域を、この地域に住み暮らす子どもたちはどれほど愛しているのでしょうか。また、私達が愛するこの地域の魅力は、本当に子どもたちに伝わっているのでしょうか。情報が錯綜する現代社会において、地域の魅力を子どもたちに伝えるためには、その地域の魅力を我々の行動によって子どもたちに届かせること、それだけではなく、我々が届けきれないほどの数多ある魅力を感じることができる環境を創出すること、この2点が必要不可欠であると考えます。

この厚木市・愛川町・清川村という地域には、未だに認知されていないものから、認知されていても十分に伝わっていないものまで、他の市町村にはない魅力が数多く存在しております。その魅力を我々青年会議所が再発見・再認識し、子どもたちに存分に体感させていくことが必要です。

もっとも、青年会議所が子どもに伝えることができる魅力はこの地域のほんの僅かなものにすぎず、この地域の魅力を自ら発見し体験することができるような環境を創出することこそ、最も重要な我々の役割と言っても過言ではありません。たとえば、学校の校歌を題材にふるさとの情景を絵画にする絵画事業を通じて、子どもたちには絵画の作成過程で地域の魅力を認識してもらいます。その一方で、子どもの両親や学校側、そして地域住民に対してどのような効果を波及することができるのか、継続的に地域の魅力を発見していく環境をどのように整えていくべきなのか。年々拡大していくこの絵画事業を50周年記念事業の核心に据えつつ、新たな効果の可能性を探求する時期に来ているのではないかと考えます。

厚木青年会議所が培った半世紀は、地域の子どもたちの笑顔とともにありました。我々が子どもたちに笑顔を与えてきた分だけ、我々は子どもたちから無限の勇気や多くの喜びを与えられてきたはずです。これまで享受してきた勇気と喜びを活力に、次の世代の子どもたちの笑顔のためにできることを考え、この50年間繋がれてきた地域の子どもたちへの心をいつまでも絶やさぬよう、行動して参ります。

【まちのために踏み出す一歩（政策）】

まちづくり運動は自己満足であってはなりません。すなわち、我々厚木青年会議所の会員がこのまちの為に考えた事業が、地域住民のニーズに応えるものでなければ、何らの意味を持ちません。つまり、まちづくり運動の第一歩は、地域住民が考える、抱える、街の問題点、すなわちニーズを研究し、顕在化させ、認識と理解をするところから始まります。それが事業の背景となり、そこから我々が達成すべき目的と達成のための手段が検出されるはずです。

厚木市長をお呼びする機会では、我々が市長とともに何を議論して、何を創り上げなければならないのか、これについて、地域住民のニーズを抽出し、吟味し、市長に対して市民の声を代弁する機会としなければなりません。厚木市長の新たな任期が始まり、かつ、統一地方選挙も控えている本年。地方自治の転機を迎えることを契機として、三市町村の多くの市民の政治参画意識を奮い立たせ、特に若い世代が積極的に選挙に興味を持つための機会を創出し、進むべきこのまちの未来を照らす一助となることを目途とします。

また、まちづくり運動と防災運動とは不可分の関係にあります。東日本大震災から8年が経過した本年、災害から学んだ多くの知識や経験を活かし、この地域の特性に着目したローカルな防災・減災運動について、我々青年会議所の会員をはじめとする責任世代の青年が理解し、実践することができていなければなりません。この地域にはどのような防災・減災運動が必要なのか、深く追求した上で、関係諸団体との連携も図りつつ、先頭に立って、事業構築をして参ります。

【全てを動かす歯車の美学（総務・財務）】

天才的なひらめきや発想の転換による大発見は、いつの時代も、地道に王道を突き進んだ者が、その道の先に見出しています。総務・財務はルーティンワークが多いため、一見すると地道な作業にすぎないとも思えます。しかしながら、時代の変化とともに会議や連絡ツールも多様化・利便化され、より使い易く、より伝わり易い方法があるのであれば、これを取り入れ、限られた時間や方法の中で最大限の成果を生み出すためのツールを用いることを推し進めるべきであります。生き残るのは、強い種ではなく、変化に対応する種である。まさに、総務・財務は、時代の変化に伴って、そのツールも変化に対応させていくべきなのだと考えます。

また、厚木青年会議所が公益法人格を取得して10年が経ちます。公益法人格のメリットを活かし、また、デメリットとなる可能性のある点を理解した上で適切に対応し、公益社団法人としての誇りを持って次代への一步を踏み出します。

【他団体との積極的交流（渉外）】

チームは、井の中の蛙であってはなりません。井戸を出て、大海を知り、そこに飛び込んで多くの刺激を得ることは、自己成長だけでなく、必ず組織自体のレベルアップにも繋がります。

地域の諸団体には、このまちに対する理念を同じくする団体が多く存在します。そのような団体と手を携え、同じ方向を目指すべく関係性を構築していくことは、将来のまちづくりにとって確実にプラスとなります。

また、地域の他団体だけでなく、表丹沢山並4 LOM に所属する他の3青年会議所をはじめとする各地青年会議所との更なる緊密な交流を通じて、知識と情報、そして刺激を受けることが極めて重要であります。日本JC や関東地区協議会、神奈川ブロック協議会などに出向することによって得ることができる経験もさることながら、より身近に刺激を感じることができるであろう隣接市町村の青年会議所との交流によって、会員が鼓舞され、会員自身が成長するだけでなく、青年会議所自体が相互に高め合っていくことの契機となることは間違いありません。

本年は、京都会議やサマーコンファレンス、全国大会、ブロック大会などの対外参加事業を会員にとっての有意義な成長の機会とするだけでなく、他団体や隣接他 LOM との交流にもより注力し、会員にとって刺激的な成長をもたらすことへの架け橋を創出する機会とします。

【会員の交流と研鑽（例会・共通）】

青年会議所活動の三信条は、友情・修練・奉仕、であります。思うに、我々青年には、この三信条を抱く前提として、三信条を掲げるに相応しい器量や度量、そして環境が必要不可欠であります。これは、青年会議所が、我々青年に積極的な変化をもたらす機会を提供していくことを行動理念としていることにも現れているところです。そして、定期的にこの器量や度量を研鑽し、また、会員同士の交流の場と

する機会こそ、青年会議所の行う例会に他なりません。

我々青年会議所メンバーが例会に参加したことで、メンバー自身が青年会議所の行動理念をより具体的に身に着け、ひいてはその行動理念が、青年会議所活動の三信条をより深く理解することに寄与し、その先には、まちづくり運動に対するモチベーションや意識改革、課題の発見、そして技能の向上、連携の強化、など、多くの成長要素を得ることができる場となるはずです。本年の厚木青年会議所の例会は、主として、会員がまちづくり運動を行う前提として抱くべき素養を磨く機会と会員交流の場という位置づけとし、会員の成長と繋がりを深めることを目的とします。

【調整統括機関としての室の役割（室長）】

委員会を束ねる室は、単なる正副理事長と委員長との間の連絡機関ではありません。担当する委員会の関連性を深く考察し、単なる委員会ごとの活動を超えて、委員会相互の横の連携を効果的に行う、調整統括機関であるといえます。室長は、各委員会の例会・事業を監督するだけでなく、担当委員会に共通する活動方針から導くことができる委員会の枠を超えた連携、その指揮をとる役割を担っています。

委員会内の士気が高まったその先に、委員会の枠を超えた壮大な景色を描くのは室長という重要機関による調整と統括行為であり、室長には、会の方針と委員会のそれとの間で調整するだけでなく、委員会を統括し委員会間の相互調整を行うという重大な役割があるといえます。

【成らぬは人の為さぬなりけり（共通）】

議論や伝聞だけでなく、行動することこそが、青年会議所活動の原点であります。百聞は一見に如かずと言われるとおり、実際に行動し、経験するなどして得た実体験を通じた観察と考察こそ、計画の資料となるべき背景たりうるはずです。実際に見て、聞いて、触れて、経験して、そこから得られた情報をもとに、課題を見つけ、改善策を考え、そして実践という行動に回帰する。この繰り返しこそ、青年会議所活動のあるべき輪廻であると考えます。机上の空論から成功の解を導くことは難しく、実体験に裏打ちされた資料と根拠から議論することを至上命題として活動原理と位置付けます。

成功していないのは、成功に向けて行動しなかった結果であると考えます。会員拡大であれば、手法の精査や計画立てに囚われて実際に行うことがないのでは、計画を立てないまま行動するよりも遥かに無意味です。まちづくり事業であれば、まちの実態や現状を伝聞や資料レベルで確認するだけではなく、実際に現場に行ってみて、現地の人のお話を聞くなど、その目と耳で見て聞いて感じたものを真実と捉えることで、事業の背景や必要性に説得力が生じます。全ての活動に必要なのは、単にキレイな計画を立ててキレイに行動することではなく、泥臭くとも地道に汗をかいて、目標に向かって突き進む行動力です。そして重要なのは、事業自体の成功ではなく、そこに向けて一心不乱に行動したことで得ることができるメンバー自身の成長であると考えます。

【おわりに】

以和為貴（和を以て貴しと為す）。

これは、我々が住み暮らす日本の古来創世記において最も古い法律であると評されている十七条憲法、その冒頭第1条の第1文であり、わが国で最も古い条文、すなわちこれは、日本で最も初めに創られた規則であります。

私達の先祖が創り上げたこの国の初めてのルール、私はこれを、

“とにかく仲良くやること”、このように訳します。

古来より受け継がれてきた「和」の精神、それは、対立するあらゆる要素を「調和」する、日本人の美しき和みの心にあるのです。

この地域に同じ志をもった仲間が、「和」を以て、青年会議所というチームによって結ばれ続け、本年で半世紀。この50年間で受け継がれし和の心を、本年、来年、そしてこれからの半世紀にも未来永劫継承する、その礎となるこの一年間を、青年としての英知と勇気と情熱をもって、全身全霊、担ってまいります。

以上